

7. 縦隔腫瘍の臨床病理学的研究

長崎大学医学部附属病院で1961年から1984年までの24年間に経験した、縦隔原発の腫瘍158症例について臨床病理学的検討を中検病理と共同研究を行い、文献的考察を加えた。当院における発生頻度は胸腺腫瘍(29.7%)、神経性腫瘍(23.4%)、胚細胞性腫瘍(21.5%)の順にみられた。これは本邦に於ける他の施設の縦隔腫瘍の発生頻度とほぼ同様の傾向にあった(図1)。縦隔悪性腫瘍は和田らの定義に従い、1) 病理組織学的に悪性である、2) 周囲臓器に浸潤を認める、3) 遠隔転移を認める、4) 再発を認める、の4条件で少なくとも一つを満たすものを悪性腫瘍として分類した。その範疇に入る症例を抽出すると33症例であった。全縦隔腫瘍の20.9%を占め、和田らの全国統計の30.3%に比しやや

低い傾向にあった。悪性腫瘍の組織分類では胸腺腫は16例で悪性腫瘍の48.5%と最も高い頻度を示した。これら和田らの全国統計と同様の結果であった(図2)。胸腺腫の遠隔転移は一般に少ないとされている。我々の症例では胸腺腫の2症例に遠隔転移がみられた。胸腺腫と重症筋無力症の合併例は6症例(15.3%)で、Hoffman(34.6%)、正岡ら(52.0%)の報告に比し低い値であった。現在では胸腺腫における悪性の診断は組織学上から困難である。今後更に多くの症例を臨床病理学的に検索し、胸腺腫の悪性の診断が容易で再現性のある定義が望まれる。原爆との関連性においては今後の研究課題である。

(井関充及、岸川正大)

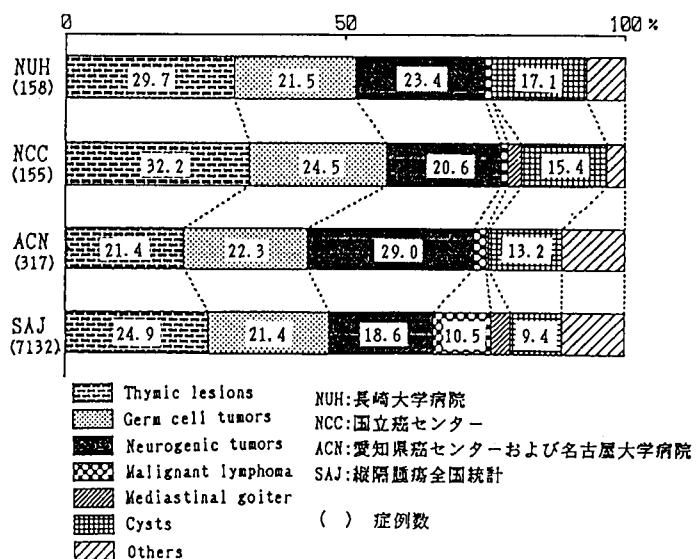


図1. 縦隔腫瘍

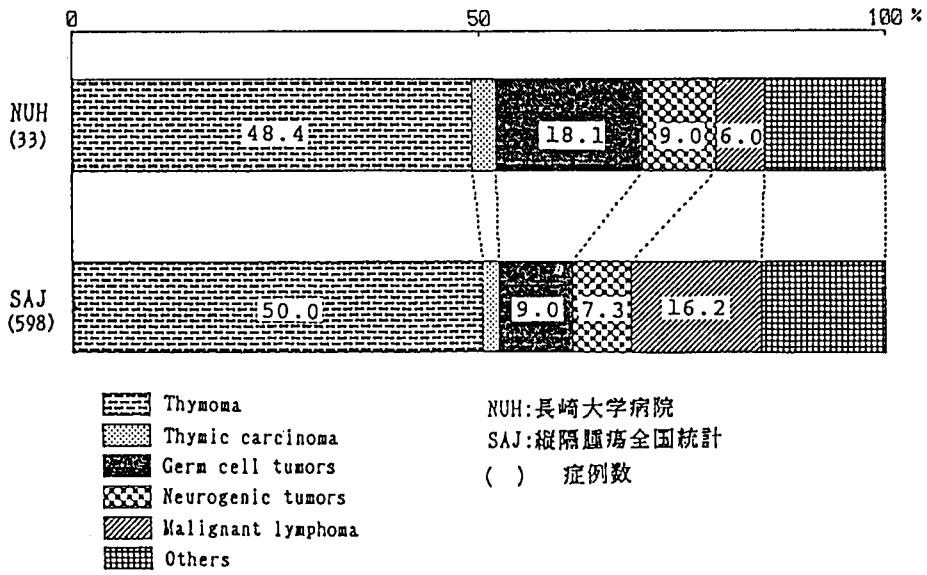


図2. 縦隔悪性腫瘍